

# 論文の和文概要

氏名 金峻現

(博士論文の題目)

他者との競争から自己との競争への勝利、敗北、卓越性に関する認識論的な  
転換

(博士論文の概要)

本研究の問題意識は現代スポーツを脅かす倫理的諸問題を背景にしている。たとえばそれは、暴力や八百長、選手・審判の買収といった諸問題である。本研究の議論は、こうしたスポーツにおける倫理的諸問題の解消を目指し、自己との競争における勝利と敗北や全ての人々が達成できる卓越性の存在を見出す。そして、こうした存在を通じて、本研究の目的は、スポーツの競争における勝利、敗北、卓越性への新たな認識論的な転換を明らかにすることである。

スポーツ哲学の先行研究は、勝利至上主義(いかなる手段を使っても勝利を得ようとする傾向)に警鐘を鳴らし、スポーツでの競争における対戦相手のとらえかたを批判的に再考してきた。総じて、先行研究の議論では、対戦相手を打倒すべき敵ととらえるのではなく、対戦相手を卓越性の相互追求における協力者としてとらえるべきことが指摘されてきた。先行研究の議論は、他者との競争という範疇にもとづいて競争の概念を考察してきた。

こうした研究動向に対して、本研究の第1章では、他者との競争を基盤とした卓越性の追求という理念の限界を次のように指摘した。(1) 他者との競争という認識枠組みでは、スポーツにおける競争の全容を把握することができない。

(2) 卓越性の相互追求の概念は、敗者が達成できる卓越性を提示できない。こうした限界にもとづき、第1章では、スポーツの倫理的諸問題を解決するためには、他者との競争という観点のみならず、自己との競争という現象を考察する必要があることを明らかにした。

次に第2章では、他者との競争の観点からは説明することのできない現象を自己との競争の観点から考察した。第2章の議論は、スポーツのフェアプレーの2つの概念(形式的フェアプレーと非形式的フェアプレー)の観点から、自己との競争における敗北について検討するものであった。その結果、第2章の議論では、競技者が他者との競争に勝利した場合であっても、自己との競争の観点

## 様式3号

からは自己否定にもとづく敗北と見なされうる事象が存在することが明らかになった。

第3章では、哲学の根本的観点である「何か、なぜか、どのようにしてか」という問いを通じて、自己との競争における勝利の存在について考察した。その際、第3章では、新体操選手であるソン・ヨンジェの事例や主張を参照しながら考察を進めた。その結果、第3章の議論では、他者との競争に敗れた場合であっても、自己との競争においては勝利と見なしうる事象が存在することを明らかにした。

最後に第4章では、卓越性の相互追求という概念の限界を批判的に検討したうえで、競争における敗者も達成可能な卓越性の概念を考察した。その結果、第4章では、個人的な卓越性と相対的な卓越性を区別して、スポーツに参加するすべての競技者が卓越性を獲得するための条件を明らかにした。

この分析に基づき、本研究は、全ての競技者やスポーツに関係する人々が自己との競争から見出される価値を追求すべきであることを論定した。そして、この価値の追求は、他者との競争に基づく勝利のみに依存すべきではないことも論定した。本研究の成果は、スポーツの倫理的問題を解決するために、他人との競争を基盤とする勝利を追求するだけでなく、自己との競争から生じる様々な価値を認識する必要があることを明らかにしている。

もちろん、本研究の成果のみから、スポーツの世界に存在する倫理的諸問題のすべてが消失するとはかぎらない。実際のスポーツの場面では、競技者が他者との競争に目を奪われ、自己との競争を放棄してしまうこともあるからである。とはいえ、本研究が提示した自己との競争における勝利や卓越性を追求してゆくことは、少なくとも、現代スポーツの倫理的諸問題を減少させうることを期待することができるだろう。